

ハーバーマスとデリダのヨーロッパ

三島 憲一*

「しばしば、この脱構築の時代と啓蒙とが対置されることがありますが、それは違うのです。私は啓蒙の味方、進歩の味方であり、〈進歩主義者〉です」。デリダ
「差異に敏感な普遍主義」ハーバーマス

1. はじめに——神々のパッチワーク

哲学や社会学のみならず、文科系や社会科学系の分野一般で、学問の精神とまったく相反する神様選びと偶像崇拜がわが国に横行して久しい。西欧の偉大な思想家や理論家を自分が世界をみる枠組みにしてそれで「事足れり」としている気配が濃厚である。それはヘーゲル、ルソー、フッサール、ニーチェといった古典であったりする場合もあるし、マックス・ヴェーバー、ハイデガー、バーリン、シュトラウス、あるいはハンナ・アーレント、ハーバーマス、フレーザー、バトラーといった比較的新しい名前であったりする場合もある。多くの人は、時には卒論以来一貫してそういう名前をやってきて、もはや、その神様が作ったものの方の見方や概念以外では頭が動かなくなっている。もしも神様が批判されると、「一部だけ読んで批判されても」とか「最近出ている遺稿を見るとそういう単純な批判は出来ない」とか「それを彼に要求するのは無理だよ」といった形でなんとか自分のアイドルの名誉を救おうとするのが、よくある台詞である（こうした弁護の戦略についてはかつて加藤尚武氏が現象学関係の雑誌に、フッサールのファン・クラブを揶揄して痛快な文章を書いていたが、ファン・クラブの方からの応答は、私

の耳には聞こえてこなかった)。当該の神様＝思想家の書いたものをたくさん読んでいる方が、その神様＝思想家をちょっとかじった人間よりものがよく見えるという特権性が自動的に発生するという思い込みは、日本独特と言ってもいい。マックス・ヴェーバーのようにかつて極度に偶像化されていた場合には、今度はヴェーバー教団の内部で、本家と分家の激しい、とても学者同士とは思えない個人的誹謗中傷も含めた乱暴な言葉が交わされるが、それは大なり小なり他の教団や宗派にもあてはまる。また、こうした教団や宗派の総括責任者は時には、神様のヴェーバーやニーチェやハイデガーより偉いことがある——本願寺の宗務総長がお釈迦様より偉いものと同じかもしれない。

同じことはこうした傾向を解体するべく登場したポストコロニアリズムやフェミニズム、カルチュラル・スタディーズといった比較的新しい知的動きについても言えるから、根は深い。そこではまだ教団組織は固定化していないが、逆に原始キリスト教のように狂信的で、学問と宗教が違うことを忘れ、自他の境界線に激しく固執するので、彼ら自身がカルチュラル・スタディーズの対象ではないかと思える時すらある。ようするに事柄に即した議論ではなく、知的認識と「生き方」をあまりに近く考えてしまうのである。この点でニーチェは私などよりはるかに嫌みたっぷり書いている。

* 東京経済大学教授

「こうした連中にとってはある話題についてともかくなんらかの仮説を見つけるだけで十分なのだ。……ある意見を持つということは彼らにとってはもうそれだけで、その見解にファナティックに熱狂することであり、それを信念として心に宿すことなのだ」(『人間的な、あまりに人間的な』635番)。

こうした私小説的発想と並んで、もうひとつ日本の学術風土の特徴を挙げねばならない。両者は支え合っていると思われる。それは、学問の普遍性と反する、やはり前＝学問的な条件に発するなんとか大学哲学界、なんとか大学政治学会などという大学別の学会の存在である。若い後進の業績作りが口実であったとしても、なんとなく出身組織のなじみでできあがっている暗黙の、また時には公然たる編成である。科学社会学的な機能は、全国区に行かないで済んだり、その練習試合の場であったりするところにあるようだ。組織原理が三田族とか馬場族、あるいは待兼山集団というアイデンティティ集団であり、普遍性に反する民族主義である。そこで扱われているテーマは最近では、ナショナリズム批判であったり、アイデンティティの脱構築であったりしても、集まっている原理がきわめて未熟かつ素朴なアイデンティティ集団なのであるから、まさにパフォーマンスの矛盾としかいいようがない。

この状況は、学派が仲良しグループ的であることとも関連している。フェミニズムやポストコロ系の議論では、さすがに三田族とか本郷国とかは影を潜めているが、自然発生的な仲良し集団のあり方の無反省ぶりは基本的に似ている。排除の構造を論じながらの排除特性があることに見て取れる。これにさらに使用言語別、またフランス系、ドイツ系などの宗主国別のバイアスがかかるともうそのパッチワークと群雄割拠の状況は、ユーゴスラビアの地図など単純そのものに見えてくる——もっとも最近では、英語しか読めない人々が、英語帝国主義に乗りながら、こうした隠れたヘゲモニー活動をしているようだ。

神様による、つまり宗派による区分けと、族による区分け、言語による区分け、時には関東・関西の区分けとが複雑に重なり合っているこの状況では、そういうこととは無縁になされてきた戦後

50年のヨーロッパの知的＝公的議論の配置はなかなか分かりにくいのも無理はない。すぐに宗派と神様の色眼鏡を表面に出してしまうところでは、他者のテキストとの対決から問題を作り上げていく解釈学的な日常習慣も、思想の事柄から考え直すというアクチュアリティな思考も根付きにくい。解釈は神がいなくなって可能なのである。あるいは啓蒙期における歴史的な聖書解釈学を見れば分かるように、神の台座にのこぎりをかけていく作業のはずである。ハーバーマスもアドルノもデリダも見落としや見間違いや、概念戦略の誤りがあるはずだが、日本ではあまり自分の神様の誤りを言う人は多くない。

2. デリダ好きからのハーバーマス批判—— あたっているところとはずれている ところ

デリダとハーバーマスをめぐる国際的議論が続いた90年代、日本ではほとんど議論もなく、多くの場合、感情的対立に終始したのもそのせいであろう。いや、感情的対立にもならず、おたがいに避け合い、グループ同士で、想像上の相手を自分に都合の良いように固定化して批判していた、というのが通常態であったと思われる。これに独仏の言語的距離が加わると、もう対話などというものではない。

デリダ愛好家から見れば、ハーバーマスは市民社会的公共性の信奉者であり、そうした公共圏が女性や子供を排除していることに目が届かない〈強者の普遍主義〉の代弁者である。さらには、そうした18世紀の夢物語を可能にした一定の豊かさが、当時のヨーロッパのヘゲモニーと植民地の搾取を前提にしていることを見ようとしなない理性の帝国主義者である。さらには、ヨーロッパ、いやドイツの戦後にある程度実現したタイプのデモクラシーを絶対視して、西欧以外にも広めようとするだけで、その様子は男性中心主義そのものである。差異をひとしなみにならそうとする理論家ではない。要するに普遍主義がいかに暴力であり、抑圧であるかを見ようとしなない社会学者とされている。好意的あざけりの場合には「啓蒙を愚直に信じている」というのもあった。「愚直」という言葉を使える自分の方が、知的に上等とい

わんぱかりの子供じみた誇りも込めてである。

こうした非難はその大部分が簡単に反論できるものである。ハーバーマスは市民社会的公共性を賛美したのではなく、その構造変化の問題性を論じたのである。さらには女性や子供の排除があることが問題であることを、まだ「排除」などという言葉が思想の世界で市民権を獲得するよりずっと早く、すでに1961年に公共性の本の中で論じている。それもカントを重視しながら、しかしカントの見誤りとして批判するという当然の解釈手続きをしている。その上で、啓蒙はそうした排除に気がついて、たえず新たな包摂をするところに理性の反省能力がある、という議論をする——ちなみにデリダは、こうした「法の改善」こそ「法の脱構築」なのだ、脱構築は啓蒙の延長なのだ、と述べている。似たようなことをまったく違った表現で述べていることになる（例えば『デリダ、脱構築を語る』岩波書店）。逆に言えば、まったく違った表現だが、言っている内容にはそれほど差がない。ところが、ハーバーマス批判派はことをドラマチックにして、粗雑な頭で、ヘーゲルが『法の哲学』の序文という違ったコンテキストで言っている名言を利用すれば「感情の粥」に沈みながら、「普遍主義って抑圧じゃないですか」などと述べていた（もちろん、普遍主義を抑圧と感じさせる経験とそのエヴィデンスは重要である。しかし、その経験を賓辞で結んで、それについて論じうる命題としても受け取れる文章で、このように表現するのは、問題をはらんでいる）。

また、ハーバーマスには実体的な「理性」という単語などは、便宜的な使用を除けば、ほとんど意味を持たないことも無視されていた。ひとつの例を挙げれば、彼においては、対話がなされるときは、他者への想定、つまり「相手は本人としてはリーズナブルなことを話そうとしているはずである」という「合理的な」想定が出発点とされているのである。たとえ、相手が嘘をついているとじきに見抜く場合でも、聞き手はまずはそうした想定をしているはずである、という形式的な前提である。また、討論のなかでは、話のすじやつながりや説得力（ここではレトリックと近い）しかないというプラグマチズムと言語行為論の結合が、対話理論にはある。これは、むしろ実体的理性の解体である。さらには、こうしたポスト形而上学、

デリダなら形而上学の崩壊の後での理性は、差異に対しても開かれていることは、彼の政治的エッセイのなかで二重国籍や同性愛をめぐる議論に触れているところを、ほんのちょっとでも読めばわかる。

とはいいいながら、ハーバーマスに対するいささか短兵急な、おそらくは英語の文献から写したような、そして飲み屋で断定的になされる批判にも一定の理由がある。それはハーバーマスの文章の調子が、そしておそらくは議論の仕組みが、ぎゅーぎゅーと理詰めにもせまってくるので、どこかで、ある特定のライフスタイルを指定してしまっている匂いがあるところである。ものわりのいいリベラルな知識人へと局限しているかのように見えるところである。さまざまなライフスタイルに寛容で、人の話によく耳を傾ける、常識的な暮らしをする人だけがデモクラシーに適うような匂いにあふれている。それは、先の形式的前提を実質的なそれと混同して理解するためであるが、ハーバーマスの文章にも、そうした混同へと強く誘っているところがある。

考えて見れば、ハーバーマスが重視する芸術的モデルネの代表者たちは、決して模範的な民主主義者ではなかった。モデルネの冒頭を飾るボードレー以来の一連の「呪われた詩人たち」の生活を思い出すだけで十分であろう。20世紀前衛の代表者たちは、マーラーであろうが、グロピウスであろうが、あるいは、ピカソであろうが、彼らのほとんどは薄汚れた国家権力を嫌ってはいるが、善良な市民への激しい嫌悪も彼らに共通している。どうもこのあたりがしっくりこないところもある。実際にハーバーマスのモデルネ理解に批判を加える人もいる。

もちろん、こうしたライフスタイルの多様性は、ハーバーマスも理論的には織り込み済みなのだが、それが浮き立ってこないのにも理由があろう。公共の政治的・法的議論におけるコンセンサス（例えば古典的な市民権についてのコンセンサス）の方を、私的かつ詩的な言語交流より重視するゆえであろう。そこには経済に対する政治の優位を確立しようとする古典的な左派の傾向が生き残っているのかもしれない。

もちろん、「人間と人間の間」に完全な理解などあり得ないのに、それがあのかのように言ってい

るハーバーマスは強者の言語を押し付けるだけである」という単純な批判は通じない。理解は、事柄についての理解であることは、解釈学がすでに明らかにしている。同時に「言語とは他人の言語であり、自分の言語と思っていても、それも他人の言語である」とするデリダが指摘する普遍性と特殊性の弁証法（例えば上記のシドニーでのワークショップ記録参照）、つまり発言を理解してもらうためには他者と共有する言語の普遍性を必要とするが、言おうとすることは一回限りの私の特殊なことからである、というデリダのいう「アポリア」は、すでに、『認識と関心』のデルタイの章で、発言の事象内容の特殊性と間主観的に妥当する言語の普遍性という、解釈学的な表現ではあっても、すでに指摘されている。理解とはロマンチックな同胞感（Verschwisterung, Verbrüderung）のことで無限抱擁のことでない。

とはいえ、ハーバーマス本人もローティなどの批判から、自分のテキストの問題に気づいたのか、最近ではスタンスを変えつつある。例えば価値と規範、生活形式と生活スタイルといった概念上の区別を以前より重視するところなどがそれである⁽¹⁾。しかし、ここに潜む概念戦略上の問題と乗り越えの試みについては、今は論じる場ではない。いずれにしても、どんな人でも間違いも、見逃しも、思い過ぎもある。批判することが必要である。批判と非難は区別した上であるが。

3. ハーバーマス好きからのデリダ批判—— あたっているところとはずれている ところ

それに対してデリダに対するハーバーマス好きの批判は、もっと批判にもなっていないことが多い。「言葉遊びが多すぎる」「ハイデガーの影響が強すぎる」「政治的メッセージがはっきりしないし、デモクラシーの理論がない」「理性的議論の不可能性ばかり言っている」「所詮は現状の全面的否定に自己満足する」「疑惑の解釈学」（リクール）かロマン主義の二番煎じだ、といったところが多い。

言葉遊びとハイデガーの影響は、それが近代ヨーロッパの枠組みへの批判、いや批判という言葉はまだ不十分で、既成の枠組みのなかで、その枠

組みに挑戦するという困難な解体の作業の上で必要なものという面に少なくとも目を向ける必要がある。もし批判するなら、それからのことである。個別言語（彼の場合はほとんどがフランス語）の中での普遍的概念の問題的な連関を通して、ローティが「西洋の語彙」という近代の主要概念の問題的な連関を見せようとする作業であることを見逃してのデリダ批判にはあまり意味がないであろう。それに、デリダは、例えば歓待の議論でわかるように決してロマン主義の夢想家ではない。「自分の家は自分で守る」のは当然であり（彼も夜は自分の家に鍵をかける）、誰でもどんどんフランスに來いなどと言った覚えはない、と先に引いたワークショップでも述べている通りである。

たしかにドイツの場合、ハイデガーもニーチェも保守右翼と文化本質主義者（西欧の存在の歴史の運命）に回収されているところがある。ポストモダンの本を出す出版社はかなり右に偏った本も出していることが、ドイツでは多い。出版社が特定の知的＝文化的プログラムを体現している伝統があるだけに、このことは問題であるし、またこの伝統を知る者から見れば、ハーバーマスの言葉を使って「青年保守主義」というレッテルをフーコーやデリダに貼りたくなるのも無理はない。それにロマン主義以来、自我の内面を掘り下げたり、言語の反省性を言語によって論じきろうとした思想は、ドイツでは必ずと言っていいほど、政治的には保守もしくは過度のナショナリズムに陥ってきた。

しかし、思想にはいろいろな読み方があり、ハイデガーやニーチェに特定の読み方しか認めないのは、ハーバーマス自身の解釈学的な幅の狭さでしかない。そして、まさに冒頭に述べた、日本の学者の神々崇拜はさらにその狭さをほとんど偏狭なものにしている。左翼ニーチェは、すでにニーチェの死の直後から、左翼ハイデガーに関しては少なくとも第二次世界大戦直後から少なくともフランスでは存在している。例えば、ニーチェを最初に読んだ人々には、若いユダヤ知識人が多かった。彼らは基本的には普遍主義を志向するリベラル・レフトであった。私なども、「ニーチェをやっていて、よくハーバーマスが読めるね」という人生論とロマンチズム以外のなものでもない揶揄を飲み屋などで、どちらかといえばアドルノ

とニーチェの方が未分化に好きな大物中の大物知識人から言われて、その質問の無意味さに愕然とした経験をなんども持っている。

とはいいいながら、デリダに対するいささか短兵急な批判にも一定の理由がある。というのも、ドイツと違って共産党の強かったフランスでは、古典的左翼に対するある種の自己嫌悪が文化的左翼にあまりにも強かったために、直接的な政治図式にはまることをデリダが長いこと回避したからである。さらには、モダニズムの芸術における言語経験などを過度に重視し、通常の生活のなかでの言語活動の意味をあたかも「非本来的」として蔑視しているかのごときところがあるからである。そして、ハイデガーの衣鉢をついで西洋の基本概念的解体ないし脱構築をはかるところでは、ある種の哲学的高慢が見える。歴史は哲学的概念が作ったのではない。こうした哲学的＝特権的態度は、対話の対等性の条件を追求し、可謬主義を重視するハーバーマスの立場とは相容れない。また、デリダの概念戦略は、結局のところ linguistic idealism の罠に迷い込む可能性が高く、それが哲学的高慢と断定調の文章に帰着するのだが、それについてもここで述べている余裕はない。

4. 「近代——未完のプロジェクト」 における青年保守主義批判 ——ハーバーマスにおける時代の読み 誤り

そもそもデリダとハーバーマスの知的構えの相違が対立としてとらえられ始めたのは、1981年のハーバーマスのアドルノ賞受賞講演においてである。「近代——未完のプロジェクト」というタイトルの、その後あまりにも有名になったテキストである。現在では、このテキストを読まないでも批判できるほどにまで内容もさまざまにかたり伝えられている。

このテキストのしばしば見逃されているポイントを5つほど挙げておきたい。

第1は、「モデルネ」という単語における歴史の意味と美学的意味の融合である。つまり、新旧論争以来の意味、すなわち、たえざる革新という時間的な意味が、もうひとつボードレー的な意味、つまり、瞬間のなかに崩落の美を見するという

モダニズム芸術の意味、時間が崩壊する経験という意味と融合しているところである。歴史家や社会学者や政治学者の議論は、この芸術的・美的モデルネの強調を見逃しがちである。しかし、この講演における「モデルネ」論は、まさにアドルノの美的モデルネへの絶対的忠誠を踏まえていることを忘れてはならない。ハーバーマスにおけるコミュニケーション的行為もその軌道にあって、瞬間の賛歌という側面があることが見落とされがちである。

第2には、近代における理性の分化を、ヴェーバー的なさめたまなざしで、もはや不可逆なものとして確定していることである。それに応じて成立した専門分化は、ただ1つ「論証による根拠づけ」という手続きでつながっているだけである。そしてこの分化は脱伝統化のプロセスでもあった。

第3は、この分化の止揚のさまざまな試みとその失敗は芸術に、それも、モデルネの芸術にもっともよく見ることが出来る、とされているところである。オクタヴィオ・パスを使いながら、シュルレアリスムにおける芸術と生活の一致のプログラムを批判し、68年の運動をその同じく誤れる再来として見ているのもそのためである。

第4に分化の結果として、そのコミュニケーションの構造が自立してきた合理化された生活世界の抵抗のポテンシャルが論じられる。そこにこそモデルネの芸術のポテンシャルが根を下ろしていると見るのである。そのことをハーバーマスは、当時ドイツで知識人や文化系学生のあいだで広く読まれていたペーター・ヴァイスの『抵抗の美学』を使って論じている。つまり、1930年代、ナチの支配下、地下で抵抗運動をしている共産主義および社会主義の青少年がベルリンのベルガモン博物館を訪れるシーンがある。彼らはベルガモン神殿という過去の壮大な記念物を見ながら、その背後にある支配と美、隷従と栄光、そしてこの祭壇を解体してドイツまで持ってきたヨーロッパの力について、素人なりにいろいろと討論し合う。

「彼らは、作品という客観精神である頑丈な石塊を叩き、飛び散る石片を吸収し、既成の教養伝統からも、現在の政権〔ナチ〕からも同じに遠い自分たちの環境での経験の地平に取り込もうとする。そしてこのようにためつすがめつして見

ているうちに、飛び散った破片が光を放ち始めるのだ。「もろもろの作品の巨大な集積場でしかなく、着想やひらめきの溜まり場としか思えない〔美術館に集められた〕こうしたものは、文化に関するわれわれの考え方とめったに一致するものではなかった。無産者として、こうした集積物に近づく時のわれわれは、最初はおどおどしていたし、敬虔の念でいっぱいだった。しかし、やがてははっきりして来たことがある。それは、こうしたものいっさいをわれわれは自分たちの価値評価で満たすべきなのだということであり、こうした概念総体が有効なものになりうるのは、それがわれわれの生活条件に関して、またわれわれの思考過程における困難やその独自の点についてなにかを語ってくれる時だけであるということだ」(ハーバーマス『近代—未完成のプロジェクト』三島訳, 岩波現代文庫)。

もうペーター・ヴァイスを読む人も少ないだろうが、このハーバーマスの論文について論じるのにどうしても必要であり、公共性のモデルの1つとしてもこのシーンは欠かせない。ハーバーマスを理性の帝国主義として批判する人たちは、おそらくこの辺はどうでもいいと思っているのか、ペーター・ヴァイスの作品の当該箇所を見ていないようである。

そして最後に、ハーバーマスは、保守主義を前=近代主義の「老年保守派」後=近代主義の「新保守主義派」、反近代主義の「青年保守派」の3つに分類している。「老年保守派」などはそれほど重視されていないが、「青年保守派」には厳しい目が向けられ、フーコー、バタイユ、そしてデリダの名が、背後に見え隠れするニーチェと並んでかなりの批判的距離を持って挙げられている。ハーバーマスから見れば、彼らは、モデルネの遺産を、その理性の分化を無視している。そして、歴史がどこかで間違った方向へ行ってしまう前の太古のアルカイックな神話的世界の取り返しを考えている。ニーチェはディオニュソスの名で、ハイデガーは「存在」の運命のタイトルで、近代を乗り越える力を呼び出そうとした。そこにハーバーマスの批判の理由がある。そうした一群の「青年保守派的な」近代批判のなかにハーバーマスはデリダを入れているわけである。ボードレールの

経験とニーチェの、口から泡を吹いたような『悲劇の誕生』の主張の間は、近いようでいて違うし、ハイデガーの新異教主義的な「存在の想起」とアドルノの「非同一性」への思いは違うことを強調したいのだと思われる。また、この時期、ポストモダン建築における引用過剰を、保守回帰として批判した重要な論文があることも指摘しておきたい。

ハーバーマスがこの時期に気にかけているのは、こうした知的流れが、当時始まった緑の人々(のちの「緑の党」)、そして、アルタナティーヴの生活実験を試みる人々に受け入れられていったことである。同時並行的に67・8年の運動を否定する新保守主義(ヘルムート・コール)が台頭してただけに、この両者つまり、青年保守主義と新保守主義が表裏一体ではないかと彼は思ったようだ。環境論者が政治的になる頃に、ドイツではコールを中心とする保守長期政権が誕生しただけにである。もちろんのこと、アルタナティーヴの運動と政党政治上の保守化を、つまり既成政党の図式の外に出る動きと、既成政党の図式の中での保守化とを同じ流れでとらえようとしたのは、今から見れば、ハーバーマスの完全な間違いである。20年代の悪夢からまださめ切れていなかったようだ。現実の政治ではその後緑の党は長いこと社会民主党よりも左に位置し、保守化への歯止め機能を果たしてきたからである。その点では、ボードレールとニーチェはやはり近いという面もあったのだが、それはハーバーマスの知的生い立ちからして見るができなかった。緑の党が連邦議会選挙に出ることに最初は反対したのだから、やはり古い図式に把われていた。

4.1. 『近代の哲学的ディスクルス』

いずれにしても、このあたりはまだそれほど論争的ではない。論争的になったのは、そのあとの『近代の哲学的ディスクルス』からである。シュタルンベルクのマックス・プランク研究所からフランクフルトに戻ったハーバーマスの最初の大きな仕事である本書について詳しく述べる必要はないだろうが、重要なのはそのデリダ批判の骨子である。つまり、ハイデガーはニーチェに対して「ニーチェは形而上学の克服を論じながら、形而上学に取り込まれてしまった」という批判をして

いる。デリダはそのハイデガーに対して同じ批判を加えているが、まさにその批判がデリダにもふりかかってくるのではないだろうか、コミュニケーション理論的な転回をしないために、形而上学の諸概念の配置のなかで、一カ所で足踏みをしているか、堂々巡りをしているだけなのではなかろうか、というのがハーバーマスの主張である。ただ、デリダは、ヘブライの神が消去した場所への記憶を保持しようとするために、ハイデガーのように異教的悪趣味にならずに、「政治的倫理的センシビリティ」を保持することに成功していることは認めている。つまり、理論として批判しながらも、反抗的デモクラシーの芽をデリダに見ようとしている。

だが、この点はハーバーマスにも見誤りがある。先にも述べたようにハイデガー、ニーチェが、こうした根源の思考が左翼と、そして政治的抵抗と結びつくということはドイツ思想史ではいっさいなかっただけに、彼の想像力の外であった。ともかくハーバーマスにとって、ナチスとアウシュヴィッツというトラウマのゆえに、ニーチェとハイデガーの影のあるものは、すべて規範性の無視につながり、ナチの記憶を呼び覚まし、戦後ヨーロッパが常におびえているファシズムの影を立ち上がらせるのである。この辺りはいわゆる「やけどをした子供」の恐怖感がありすぎるのだろう。ようするにニーチェとハイデガーを担ぎながら、ポスト構造主義が抵抗の思想でもありうるということが、ハーバーマスには全く理解できなかった。それは言語使用を真理論と結びつけすぎたためである。もちろん、真理を論じる言語以外の言語使用があることは百も承知だが、思想や哲学として登場するときに、それ以外の言語使用を禁じる趣があった。この本の中でデリダにおける文学と哲学の混同を詰問しているのはそのためである。

実際問題としてドイツではポストモダンほとんどが、フランクフルト学派、それもハーバーマスを叩くために保守派から使われた。先にも触れたが、バタイユの翻訳が出ている出版社のマットス・ウント・ザイツ社がドイツ右翼の最長老のそれなりに優れた文筆家 Bergfleth の息がかかっていたりする実態は日本ではあまり知られていない。また例えばボーラーは、歴史主義的＝美学的な立場から反ハーバーマスの論陣を張る。ドイツでは

ナチスの過去にあまりにとらわれていて、若者がドイツの古い文化からそっぽを向くことになってしまったとハーバーマスを批判するが、そのときにボーラーが、自説の根拠に使うのは、理性的根拠は不可能とするデリダであり、文化的コンテキストを重視するローティであり、すべては物語であるとするリオータルである。少なくともボーラーは、この3人をこのように解釈すれば、ハーバーマスを叩くことが出来ると思っている。

一般にハーバーマス批判のためならドイツではなんでも使われた。システム論とメディア論がその代表で、不幸なことにフェミニズムにもシステム論とメディア論を癒着させてそれに脱構築をまぶしたハーバーマス批判も一時は流行した。しかし、例えばシステム論からの国際法や世界法の再記述を展開しているフランクフルト大学の天才的な法理論家のギュンター・トイブナーが、ハーバーマスの高弟のブルンクホルストと二人でイニシアチブをとって、つい最近理由もなく職を追われたブラジルの批判的法律家のネーヴェス氏を守るための国際的知的運動をしていることなどは、「正しい」システム論対「空疎な」コミュニケーション的理性といった不毛な対立図式で考えている日本の、神様好きには見えてこないようだ。

4.2. 政治プログラムにおける両者の収斂

こうした背景があるとはいえ、『近代の哲学的ディスクルス』におけるハーバーマスからの批判にデリダ自身が、不当かつ拙速すぎると思ったことは、本人が後に告白している通りである。とはいいながら、二人は決してそれ以上に歴然たる論争はしなかった。デリダの言う通り、「静かにしていた」。

それにはおそらく理由があるだろう。1つはデリダ自身の政治化である。1980年代半ば頃からデリダは、基礎概念のディコンストラクションを越えて、具体的な政治にコミットする度合いを強め始めた。例えば、難民問題である。そして人種差別に関しては、当時は牢獄にあった南アフリカのネルソン・マンデラへの連帯である。人種差別の暴力の犠牲者へのさまざまな言及は、そのまま政治の言葉だった。つまり、ハイデガーにおける実体や真理や存在論という概念の解体を全く知らないでも読める言葉を語りだした。それによって、

それまではミッテランの自称社会主義への幻滅のゆえに、もっと左から社会党政権を批判するだけだったフランス知識人に、アパシーと紙一重のラディカリズムからの帰還を可能とした。

もうひとつは、デリダ自身がインタビューで述べている通り、ドイツ統一の仕方に対するハーバーマスの批判、さらにその後のネオナチの台頭や二重国籍問題についてのハーバーマスの知的介入が、デリダには好ましく見えたことがある。つまり、民族と国家を切り離して考えるハーバーマスなりの普遍主義の議論によって、デリダは、普遍主義が必ずしも西洋の理性の暴力に伴うアシンメトリーを帰結するわけではないことが理解できたのであろう。なによりも実際の政治的問題に関しては、ほとんど意見に差のないことは、ローティが指摘するとおりである。例えば妊娠中絶の是非、同性愛結婚の是非、女性の権利、労働者の福祉のあり方などの、日常生活の政治的問題にはじまり、ユダヤ人虐殺や植民地主義の過去などについては、重点の置き方の相違はあっても意見の相違はほぼない。ローティは、我々3人が、同じ国に暮らしていたら、同じ政党に投票するに決まっていると述べている。

4.3. 『他の岬』における冷遇？

とはいいながら、哲学的＝理論的にはその後も距離が縮んだわけではなかった。それは、90年代初頭のデリダのヨーロッパ論である『他の岬』を見ればわかる。

デリダはこれまで世界史を引っ張ってきたとされるヨーロッパがもつべき「責任」は、普遍的なる理性の世界中への拡張などとは別のところに見る。そういう偽りのコスモポリタニズムは、ナショナリズムと「いつもよろしくやっている」(『他の岬』邦訳38ページ)からである。それはヨーロッパの傲慢でしかなく、他者への強制につながる。

そうではなく、ヨーロッパは始めから自らの尖端を乗り越えるべきものとしてあるというのだ。ユーラシア大陸から突き出た半島のその尖端の岬にヨーロッパはある。岬はフランス語でcapであるが、それは同時に首都(capitale)や資本(capital)の語源でもある(もっともこうしたことはフランス語およびラテン系の語彙を持つ言語

でしか言えないところにデリダの「高慢」があることはたしかである。ドイツ語ならSpitze der Halbinsel, Hauptstadtでしかない)。それはファルスにもつながり、古くからの力と理性の結合の形態である男性中心主義でもある。しかし、彼が言うのは、そうした意味での最尖端ではない。通常の意味とは異なる最尖端が含意されている。つまり自らを開き、乗り越え、「岬の他者」、つまりヨーロッパとは異なる他者に開かれた尖端となるのがヨーロッパの責任である、というのだ。文化的アイデンティティにあぐらをかくのではなく、アイデンティティ自身が「自己自身と同一でない」ことに存するようなヨーロッパである。「自己にあつての差異がなければ、文化や文化的同一性は存在しない」からである。「自己自身の同一性に固執せず、自己自身の同一性ではないものへ、他のキャップあるいは他者のキャップへ、さらには(中略)この近代的伝統の彼岸であり、もう1つの船=縁(bord)の構造であり、もう1つの岸辺であるようなキャップの世界へ向かって、範例的に前進していく=突き出ていくに他ならないヨーロッパ」(同訳)を彼は要請する。

ヨーロッパの自己変容、アイデンティティなど求めない自己変容、その意味では政治亡命、経済難民の外国人も進んで受け入れること、伝統文化などに固執しない存在へと変わっていくことこそヨーロッパのアイデンティティであるという逆説を説いているのであろう。「ドイツ的であることは脱ドイツ化することである」というニーチェの警句も思い出させる。

簡単に言えば、これまでのヨーロッパの自己中心主義、実体的理解、文化本質主義をやめて、自らを開いて他者を受け入れ、それによって自己も他者もかわっていくことこそ重要であるというだけのことだが、ディコンストラクションの言語のある種の魅力は否定しがたい。こうした言語が左翼と結びつくとは、ハイデガーをドイツの角度から批判的に読んできた私などには、はじめは想像がつかなかった。ハイデガーの場合は、こうした解体の思考が怪しげなニヒリズム論的な歴史哲学となって、戦後の西欧の静かなる再建のイデオロギーにもなったからである(これについては拙著『戦後ドイツ—その知的歴史』(岩波書店)参照。

『他の岬』の中ではハーバーマス批判が出てく

る。フランス外務省が出しているヨーロッパ文化をめぐる安っぽいパンフレットのなかで知的前衛としてのフランスとその理性が善意と高慢で讃えられていることを批判したその延長上で、あきらかにハーバーマスを念頭においたと思われる批判が出てくる。討議倫理学なるものに「疑惑の解釈学」が向けられているのである。少し長くなるが引用してみよう。

「以上では、国家の言説を問題としたが、警戒すべきはただ国家の言説に対してばかりではない。最高の善意からのヨーロッパ的企図、一見して明白に多元主義的で、民主的かつ寛容なヨーロッパ的企図でさえ、「精神の制覇」をめざすこの容赦なき競争においては、媒体＝メディア、討議の規範、言説のモデルといったものの同質性を賦課する＝押し付ける試みになりかねない。……この種の言説は、透明性……や、民主主義的討議の一義性や、公共空間におけるコミュニケーションや、「コミュニケーション的行為」といったものを擁護するという口実のもとに、こうしたコミュニケーションに好都合だとされている言語モデルを賦課する＝押し付ける傾向を持っている。可知性＝理解可能性、良識、常識＝共通感覚、民主主義的モラルといったものの名において語ると主張しながら、この種の言説は、まさにそのことによっていわばおのずから、当該の言語モデルを複雑化するすべてのものの価値を貶め、当該の言語理念を屈折させ、重層決定し、理論的かつ実践的に問題化しさえするすべてのものを嫌疑し、抑圧する傾向をもつのである。分析哲学やフランクフルトで「超越論的語用論」と呼ばれているものを支配しているある種の修辭的規範は、なによりもこうした関心をもって研究されねばならないだろう」（高橋哲哉、鵜飼哲訳）。

特徴的なことは、ハーバーマスの名前が挙がっていないことである。これは慎重さなのか極度の不快感かのどちらかであろう。「超越論的語用論」はハーバーマスではなくアーペルの用語でもある。もうひとつ目立つのは、こうした討議倫理学やコミュニケーション的行為の議論が、他者を「抑圧」する危険をいいながら、そうした「傾向」と

いう言い方をしていることである。つまり、「傾向」があるだけで、必ずそうなるとはかぎらないという含意のあるところである。むしろ危険はこうした討議倫理が、大学や出版と結びついた時の特定のあり方にあるとされている。これも慎重な配慮なのか怒りなのか、当時は判断に苦しむところであった——今では、どちらであったかは明白だが。

4.4. ファンクラブにおける「神経」のあり方

先にも言ったように哲学・思想の世界では、この両者の静かさとは別に、世界中のファンクラブの陣営が、おたがいをよく読まないままに、相手を決めつけて罵倒し合っていた。日本の場合では、ハーバーマスを理解するためには、社会科学の知識がないと苦しいことも響いて、文学部系の人々は、デリダに組する人が多かった。文学部系に多い生来のアナーキーな反抗精神と、「全員に対して、かつ同時に一人一人に対して正しくあることはできません」（デリダ）といった、かつての人生論の変形になりかねない神経のあり方（ボードレー）を好むメンタリティも手伝っていたと思われる。デリダの批判は、正しさはないのに、正しいことをしていると「晴れやかな良心」を振りかざすような安手のリベラリズムの手合いに向けられていたのだが。さらにカルチュラル・スタディーズは、——デリダは、その大学論の中ではっきりカルスタをナンセンスと言っているが——マイノリティの擁護はデリダの専売特許と思いついていた。

実際にハーバーマスを読むと純文科系の言語が奪われていく感じを抱く人が多いのは事実である。ヘルダーリンの深さやランボオの地獄やニーチェの「距離のパトス」と理性の告発などと無縁に見える。こうした19世紀の前衛の言語は戦後の西側では一般の人々にはほぼ忘れられているが、こうした言語を忘れられない文学部出身のロマン主義者には、ハーバーマスはとっつきにくかった。彼らの思い込みの激しい政治志向ではついていけなかった。特に日本では、アドルノを読む人はハーバーマスをほとんど読まない。そしてその逆もまた真なりというドイツではほとんど考えられない視野狭窄が生じている。

もちろんハーバーマスは、ヘルダーリンもラン

ポーもアドルノの言語も否定しない。ただ、理性の分化の事態を受けている以上、ちょうど銀行救済の話と環境問題の話が別なように、コミュニケーション分析や公共性の理論と、アドルノやデリダを読んだときに感じられるある種の全体性思考、精神の構えの全面的な指標となるようなものは、無関係であることが前提である。本当は、デリダやアドルノのテキストも、そうした全体性や全面的な同一化が不可能になっていることを示すテキスト群なのだが——。アドルノとデリダは、概念で把握できないものの「喪失」を心情的な言語以上の言語にし、ハーバーマスは近代の分化に社会学の醒めた言語以上に批判的反省の熱を帯びさせるといった戦略の違いこそ論ずべき問題である。

5. 急接近とコスモポリタン・デモクラシー

ところが、実際にはデリダとハーバーマスは90年代半ば以降急速に個人的にも親しさを増していた。

その帰結が、2004年6月ハーバーマスの75歳の誕生日の『フランクフルター・レントシャウ』紙でのデリダの公開祝辞である。そのなかでデリダは、2人の文字通りの深い友情に感謝している。このことはインサイダーは別にして多くの人には驚きだったろう。このお祝いの文章は最後に触れるとして、その新聞の添え書きにある学芸部記者の次の文章は、象徴的である。「80年代にパリでの国際会議でフランクフルトからやってきた参加者と、フランスに暮らしているドイツ人が知り合いになったとしよう。しばらくは久しぶりのドイツ語でおしゃべりをしているが、やがて理論的な背景の話になったとたんに、フランクフルトから来た方は、「あ、それなら私は本当はあなたと話してはいけないんだ」と思わず口にしたものだ」。実際独仏戦争とまで言われた両陣営の対立は、大学のなかで属している教室や学派がどちらであるか次第で、1人1人のメンタリティの争いにまで、いや人事の争いにまでなった。1つの世代がこの対立の毒に染まった。デリダ自身、先のお祝いの言葉で、若い人たちには悪いことをした、と書いている通りである。しかし、このように書くデリ

ダの文章の調子には、勝手に陣営を作って争っていたのは彼らの責任でもある、という距離感も潜んでいる。

実際、事を荒立てたエピゴーネンたちの責任は重い。ハーバーマス・ファンのハーバーマス知らずは明らかである。ものすごい好奇心と知的誠実性がテキストにあふれている彼が、デリダを切っけ捨て、相手にしない、ということはあるわけがない。ニーチェやカール・シュミットやネオアリストテリアンからすら学ぶ彼である。逆にデリダ・ファンのデリダ知らずもひどい。ドイツ思想にあれだけ詳しいデリダである。そしてハーバーマス自身が哲学的距離は取りながら、「政治的・倫理的センシビリティ」を早くから保証しているデリダである。その彼が、多くの人々が見るように18世紀的な単純な公共性などにハーバーマスが満足しているわけでないことを見ないはずがない。

またハーバーマスの周辺には、ポスト構造主義と批判理論を媒介させようとする若い人々もいたし、彼に面と向かって、「あなたは本当のところはポスト構造主義はわかっていない」と言える弟子たちもいた。先生の理論を批判しないような弟子は、弟子の名に値しない雰囲気、批判理論の世界にはある。つまり、先生も批判を求めるのである。当然、本人はそうした批判に答えるべくデリダを読み直し、考え直し、思考を一段のぼしているはずである。逆のことはデリダについても言える。固まらないところが2人の特徴である。神様を作っている日本では、固まらない人も固まったかたちにしてしまう。解釈する側が、速く固まりたいのであろう。

こうした両者の対話の帰結が、テロリズムとブッシュの戦争に対する2人の態度である。結論的に言えば、カント的な「世界市民」思想に基づく新たな国際秩序への希望という点での2人の一致である。そしてこれは、多くの日本の研究者がアメリカの議論を追っている間に、90年代のヨーロッパの議論から、最後には国際私法裁判所やヨーロッパ人権裁判所にまで至る議論から2人が吸収したのものである。いわばコスモポリタンの転回である。

5.1. イラク戦争の後で――

デリダとハーバーマスの共同行動

2003年5月、ちょうど、アメリカを中心とした「有志連合」によるイラク破壊がひとまず終了し、イラク再建をめぐる国際的な駆け引きが始まっていた頃、ドイツの名門紙『フランクフルター・アルゲマイネ』、フランスの有力紙『リベラシオン』に、ハーバーマスとデリダは「われわれの刷新。戦争が終わって。ヨーロッパの再生」という長い題の共同署名の大きなエッセイを寄稿した。アメリカが明確に国際法を踏みじった事態に直面したヨーロッパのこれからのあり方を論じた文章である。「西洋の分裂」をどう考えるかは人々の大きな関心事であった。実際に原稿を書いたのはハーバーマスであり、病気療養中のデリダが署名したようだ。

戦後50年間に西欧に平和主義のメンタリティが定着したとする著者たちは、このエッセイで、アメリカのヘゲモニーとは異なる、EUの旧加盟国を中心としたソフト・パワーに依拠し、国際法の遵守を最優先とする多国間主義的な国際秩序の構築を唱えている。

この文章でハーバーマス/デリダは、開戦の少し前、国連安保理でのつばぜり合いが世界中の注目を浴びていた時期の2月15日、ブッシュ大統領の戦争計画に反対して、ロンドンとローマ、マドリッドとバルセロナ、ベルリンとパリなどで何百万という市民が行った反戦デモを重視する。スペイン、イギリス、イタリア、ポルトガル、デンマーク、ポーランド、チェコ、ハンガリーの首脳が連名でアメリカ支持の文章を1月30日の『ウォールストリート・ジャーナル』や『タイムズ』などに掲載し、ヨーロッパの分裂がはっきりした直後のことである。

ハーバーマス/デリダは書き出しで、この意思表示こそヨーロッパ的規模で世論が表明された歴史に残る事件となろう、と述べている。ハーバーマスの言葉で言えば、「ヨーロッパ的公共圏の誕生」ということになる。要するに、政治家や経営者でなく、1人1人の市民の政治的見解が集まって明確な姿をヨーロッパがはじめて取ったということである。政治家のヨーロッパは参戦派と反戦派に分裂したが、世論の場としてのヨーロッパは、「有志連合」参加国の首都のロンドン、マドリッ

ド、ローマの各都市で一般市民によって行われたデモが、戦争反対国の首都パリやベルリンでの市民の運動と軌を一にしていたのだから、分裂していないというのであろう。

このようにはじめながら、ハーバーマスとデリダはおおよそ以下の3点を主張する。

第1点は、ヨーロッパ共通の外交政策が今後は不可欠なので、そのためには現状を考えると、コア・ヨーロッパで先に統合を強めることも考えねばならない、というものである。ヨーロッパは「古いヨーロッパ」と「新しいヨーロッパ」に分裂してしまった。ポーランドその他の中部ヨーロッパ諸国はEU加盟を望みながらも「(ソ連圏の解体で) やっと獲得した主権をまた制限されるのをいやがっている」。もしも統一外交政策が無理ならば、ニース条約にある「異なった速度を持ったヨーロッパ」を選択する以外にないであろう。つまり、自らの主権の一部を譲渡し、EUに「国家に類似した性質」を賦与する用意のある古くからのメンバーの国々だけで、共通の外交・軍事政策への統合を早めるのも仕方ない、というのである。

第2点は、アメリカとの距離感とそれに裏打ちされたヨーロッパのアイデンティティの探求である。大統領が1日の仕事を祈りとともに始め、「重要な政治的決定を神の使命」と考えるなどということは、「我々の住んでいる地域では考えられない」と皮肉たっぷりの文章で筆者2人は、相当程度に脱宗教化しているヨーロッパがアメリカと違うことを強調する。そして、そうしたヨーロッパが冷戦の中で学んできたことは、複雑な制度化を積み重ねることこそが、そして交渉と対話によるつながりこそが、何十師団の軍事力より有効なことである、と論じる。いわゆるソフト・パワーの強調である。こうしたことが言えるのは、20世紀の最も重要な2つの問題、つまりナショナリズムと資本主義の暴走をヨーロッパはある程度、解決したからである。ナショナリズムはEUを通じて、資本主義は社会福祉国家体制によってある程度であれ調教できるようになった、というのである。特に後者に関して、アメリカと違ってヨーロッパは、市場万能主義を信奉するのではなく、むしろ、国家による文明化の力にかけるのだ、と述べる。すなわち国家は民意によって市場に一定の

歯止めをかけうるし、かけねばならない。それによって、年金や健康保険、労働者の経営参加などの社会政策が可能となり、社会的緊張が緩和されうる、ということであろう。ナショナリズムを嫌悪し、福祉国家を支える市民のメンタリティは、暴力への徹底した嫌悪に示されている。死刑廃止をトルコのEU加盟の条件にしているのも、そのためである、と。

第3点は、こうしたメンタリティは冷戦時代の産物かもしれないが、冷戦というコンテクストでのみ有効なだけでなく、そうしたコンテクストが解消しても続きうるし、また、世界に拡がりうる、ということである。つまり、ハーバースとデリダは、2つの問題を克服したヨーロッパこそは、戦争によらない国際紛争の解決という、国連を中心とした新たな国際秩序の構築を試みねばならないと論じる。それにいたるプロセスを2人は、カントに遡って「世界内政治」と呼んでいる。しかし、こうした見解はヨーロッパ中心主義とは無縁であり、ヨーロッパのヘゲモニーを求めるものではない。なんといっても、戦後のヨーロッパはユダヤ人大量虐殺の傷を深く内部に秘めているし、旧植民地帝国の汚点も残しているからである。しかし、こうした暗黒の歴史への反省から、自分たちを外から眺める冷静な態度も戦後は生まれてきたのだ、とヨーロッパ自身の変貌を強調する。

「帝国型の支配と植民地主義の過去から距離を取る度合いが強まるにつれて、ヨーロッパ諸国は、自己自身に対して反省の距離を取るチャンスが得られるようになった。ヨーロッパ諸国は、(ヨーロッパに圧倒された)敗者のパースペクティヴから勝者としての自己の疑わしい役割を見ることができるようになった。つまり、近代化を強制し、文化を根こそぎにした暴力を問いただされている勝者の疑わしい役割のことである。これは、ヨーロッパ中心主義からの離脱に、そして世界内政治へのカントの希望の再生に役立っているかもしれない」。

最後は「かもしれない」とあくまで慎重であるが、あえて逆説的に言えば、本人たちはそのような言い方をしないが、「平和のヘゲモニー」こそヨーロッパ外交の使命である、ということである

うか。

5.2. 同時多発寄稿と知識人の役割—— アメリカへの感謝と批判

いずれにしても、全般に日本やアメリカよりもこうした哲学者や思想家の発言力の強いヨーロッパ大陸の文化風土を背景として、この2人がいっしょにアメリカの戦争を批判したわけであるが、実はこの論文はこれだけにとどまるものではなかった。同じ2003年5月31日に、ヨーロッパの代表的な新聞にそれぞれの国の代表的な知識人がこの戦争についてのアメリカ批判の論文を発表したのである。スペインは、フェルナンド・サファーターが『エル・パイス』紙に、イタリアではウンベルト・エーコが、そしてスイスのドイツ語作家でベルリン芸術アカデミーの会長に決まったばかりのヴァルター・ムシュクが『ノイエ・チューリヒ新聞』に見解を載せた。アメリカのヘゲモニー志向にあきれ果て、第2次大戦後に少しずつ形成されてきたヨーロッパの新たなメンタリティを重視する基調は皆同じである。

また、遠くアメリカ本国からは、ブッシュが大統領になる前から、「もしブッシュが選挙に勝ったら大変なことになる」と警告を発していたリチャード・ローティが『南ドイツ新聞』に、とにかくヨーロッパが1つの声になってアメリカの政治を批判して欲しい、という意見を寄せた。

ローティが言うには、ワシントンの最大の関心はヨーロッパを分裂させておくことである。もしもヨーロッパが一致結束して反対していたら戦争はできなかったであろうことをホワイトハウスはよく知っている。そして今こそ、古いヨーロッパの中心部が、かつてアメリカが持っていたが、現在では失ってしまった理想主義を再生させて、新たな平和的な国際秩序のヴィジョンを提示すべきである、と彼は述べている。

「ハーバースとデリダが強調しているように、ヨーロッパの最近の夢のいくつかは実現したのではないか。ヨーロッパは20世紀後半に国民国家の克服の解決策を見いだしたと彼らが述べているのは、正しい。EU自身が……現実主義的な政治家が閑人の夢想としていたことの実現なのである。もしも、全ヨーロッパ国家の市民とい

う意識が21世紀の最初の4分の1のあいだに、かつて18世紀の最後の4分の1の時期にアメリカ市民という意識が生まれたのと同じに根を張るならば、世界は、グローバルな連邦制への道をうまく進んでいこう。このような連邦制こそは、広島以降、核兵器が生み出した問題を解決する長期的に唯一の道である、と考えられるのだ。

そしてハーバーマスに声を合わせてローティは2003年2月15日の「ヨーロッパ的公共圏の誕生」の意義を強調する。「公共の世論が、政治家たちに、自分たちが望む以上に理想主義的にならざるを得ないように仕向ける時期というものがおよそあるとするなら、まさに今こそその時期が到来したのだ。ハーバーマスとデリダが挙げているいっさいの理由から考えると、コア・ヨーロッパの市民たちこそ、このようなプレッシャーを政治家にかけるのに最も適した位置にいることになる」(傍点筆者)。カントの『永久平和論』の思想に戻って世界連邦への道を考え、かつ進ませるのは、ヨーロッパの市民たちの公共の場での発言だということである。たしかに、ドイツのシュレーダー元首相でも、フランスのシラク大統領でも相当に権力志向の政治家である。1995年のシラク大統領の原爆実験は、国民国家の権力政治そのものだった。そうした彼らの普段の言動からは想像もつかない理想主義的な発言がこの数週間には、世論と一緒に口から飛び出していた。ローティのこの皮肉な記述には「現実と妥協しない現実主義」あるいは「幻想なき理想主義」(ハーバーマス)が、巧みなレトリックとして現れている。

ヨーロッパ主要都市の新聞に代表的な識者たちが、同じ日にいわば同時多発寄稿をしたわけである。もちろん、これは偶然ではなく、ハーバーマスがイニシアチブを取って、周到な用意をしたために、これだけのメンバーが集まったようである。理論の声が四方八方から乱れ飛んだ感があるこの仕掛けにはいわゆる知識人の役目についての鋭い自覚が潜んでいた。「もしもヨーロッパがひとつの声になっていなければ、そしてアイデンティティをもてるようになっていないならば、それは我々知識人が駄目だったからでもある」と、デリダとのエッセイの中で書いたハーバーマスの明確

な自己批判にそれは見てとれる。ユーゴスラヴィア紛争のときに、特にスレブレニツァの虐殺の報道に接しながら、ヨーロッパ次元での意見形成にほとんど力を貸せなかった悔いがあるのかもしれない。

だが、同時に、デリダもハーバーマスも、いわゆるアメリカ嫌いとか、アンチアメリカニズムとは無縁である。ローティ自身、先に触れた『南ドイツ新聞』への寄稿の最後に書いている。「アメリカのメディアにおけるブッシュの弁護人たちは、ハーバーマスとデリダのアピールを、嫉妬とルサンチマンに溢れた反アメリカニズムでしかないと切って捨てるであろう。ところが、このような非難にはいかなる根拠もない。2人ともアメリカをなんども、また長期にわたって訪問し、政治や文化におけるアメリカの実績について深く根本的な理解を持っている」。また、ハーバーマス自身が、直後にベルリンで行われたキリスト教民主同盟(CDU)のショイブレとの討論会でも、まさに自分たちの世代こそ、国家を中心とした「現実政治(レアール・ポリティーク)」だけで世界を見ないことをアメリカから習ったのだ、と述べている。あるいは国際関係をさまざまな手段を使った主権国家の抗争、戦争を最終手段(ultima ratio)とする権力政治として見ることへの懐疑をアメリカのデモクラシーの伝統に学んだのだ、とも述べている。国威発揚のばかばかしさをアメリカから学んだ、ということであろう。

今のアメリカは、ナチスの戦争の後で自分たちがデモクラシーを学んだアメリカからは遠くなってしまったが、それを言うのは反アメリカ主義とは違うのだと、さまざまな個所でハーバーマスは強調している。むしろ、反アメリカ主義は、ドイツではすぐに反ユダヤ主義と結びついて過去の亡霊を引き起こしかねない、という考え方である(例えば雑誌『世界』2004年4月号・5月号掲載のインタビュー)。アメリカ・シンパの左翼というのは、日本にはほとんど存在しなかったから、このあたりは我々にはなかなか理解しにくい。しかし、少なくともドイツでは、ベンジャミン・フランクリンの自伝を分かっているだけでも2度は読み、ドイツのフランクリンとも時には言われたゲーテが大のアメリカ・ファンであったことは昔話としても、アメリカの左派デモクラシーへのシ

ンパシーは長い伝統をもっている。ちょっと想像しにくいかもしれないが、カフカもホイットマンの愛読者だったことが思い出される。特に、国家を越えて個人の権利を擁護する思想が、そして、カントを受けて国家間の戦争を違法とする国際条約（ケロッグ＝ブリアン条約）のイニシアチブがアメリカから生まれたことは、ハーバーマスが高く評価するところである。自分たちの評価するアメリカを背景にして、現在のアメリカを批判するのだ、ということである。

6. カントの希望とニーチェの主張の出会い ——神々の葬送

ここで、先に触れたハーバーマスの75歳の誕生日のデリダのお祝いの文章に戻ろう。ここでは正面からヨーロッパおよび、国際秩序における立憲化へのカントの希望が論じられている。

例えば、デリダは、ニューヨークのテロの後の、日本語にもなっている2人のインタビューについてこう述べている。

「この本、そしてこうした種類の声明、またそれ以外のいくつかの表現、これは我々それぞれの友人たちにとって謎だった。多くの友人たちは心配し、また他の友人たちは怒っていた。それについて既に無数の出版物が出ている。そしてハーバーマスは、彼がこの問題について行ったインタビューの答えを、例のない礼儀正しきで私にそのたびに送ってくれた。しかし、何があろうとも、二人がこの道を先に進むことにくじけてはならない」。

啓蒙のプロジェクトと脱構築が矛盾しないどころか同じであることが明確に表明されている。先に引いたシドニーでの発言にもこうあるとおりである。「私は〈完成可能性〉（啓蒙のキャッチフレーズ＝筆者）の過程をととても大切に思っています。なぜならそれは18世紀のコンテクスト、啓蒙（Aufklärung）によって刻印づけられているからです。しばしば、この脱構築の時代と啓蒙とが対置されることがありますが、それは違うのです。私は啓蒙の味方、進歩の味方であり、〈進歩主義

者〉です」。

それゆえ、「何があろうとも、2人がこの道を先に進むことにくじけてはならない」というときの、この道とはカント的な世界市民的秩序への道であり、かつ社会民主主義の道であり、そのためヨーロッパ公共圏への期待であることがはっきりと表明される。

デリダは、ドイツ統一後の国内問題へのハーバーマスの発言に「賞賛を込めた賛意」を送っているだけでなく、G8、世界銀行、IMF、WHOなどの国際機関の煽動で進められるグローバル化に対抗する、社会的公平のヨーロッパの建設に共同で参加しようと唱えている。もちろん、それはヨーロッパだけでは不可能だから、当然、世界における法的正義へのカントの道でもある。その連関でデリダは、ほとんどハーバーマスの言葉を使いながら、熱心に国連改革の希望を語る。改革された国連だけがイラクに平和をもたらし、パレスチナ問題の解決を可能にし、他者の声に耳を傾けることができるのだ、と。2人を友情で結ぶのはカントのコスモポリタニズムであった。「ヨーロッパ的憲法愛国心」というハーバーマスの言葉に、デリダは「愛国心」はちょっといやな響きがあるけど、彼の意図は分かると述べて、全面的に賛成している。これは「理性的感情」のことである、と。そしてヨーロッパ共通の憲法、ヨーロッパ共通の政治文化と公共圏が人々の身体に、心情に、具体的な生活にまでしみ通るように、それぞれの国で、そして2人で「ドイツ、フランス、ヨーロッパ、そして来るべき世界」のために努力しようではないか、という趣旨の言葉を贈った。そしてドイツ基本法第一条をデリダは引いている。「人間の尊厳は冒しがたい。これを尊重し、守るのはいっさいの国家権力の義務である」。ここにこそデリダも同意する「コスモポリタン・デモクラシー」の出発点があるということであろう。

少し長くなるが引用しておこう。

「ハーバーマスのきわめて先見の明のあるメッセージに、明日のヨーロッパの〈責任者たち〉が、私と同じように耳を傾けてくれると、期待していいだろうか。私も〈責任者たち〉がそうしてくれるとは本当は確信していないのだが。ハーバーマスは書いている。「いかなる意味の暴力も、

社会的かつ文化的な形態の暴力も含めていかなる形態の暴力も飼いならそうとつくすヨーロッパだけが、ユーロセントリズムへのポストコロニアルなぶり返しに対して守られているのだ。あるいは「諸政党はもしも未来に対する勇気を示すつもりなら、コスモポリタニズムのはかりに自らの重しをおく社会的ヨーロッパを作るという2つの目標を綱領とするヨーロッパの活動領域を切り開かねばならない」。ハーバーマスのこうした文章には、最良の政治哲学を読み取ることが出来る。

ちなみに引かれているのは、シュレーダーが政権交代を成し遂げたときの選挙運動のためのシュレーダー氏の勉強会と宣伝（ハーバーマスとも議論できるほどの知性というイメージ作戦だった）を兼ねたシンポジウムでのハーバーマスの講演「ポストナショナル・コンステレーション」である。

デリダはこの誕生日のお祝いの文章で、差し迫ったヨーロッパ議会の選挙を心配しているが、その後の動きは、ヨーロッパ憲法へ向けての見通しが暗くなっている。

最後にデリダのお祝いの手紙が、「我々の誠実さ」というニーチェの引用ではじまっていることを忘れてはならない。デリダとハーバーマスにおいて（ひょっとしてハーバーマスは多少ともいやがっているだろうか）、ニーチェとカントが出会っているのである。理性の欺瞞を告発し、個性と差異を情熱と芸術の名によって擁護したニーチェと、人間を目的として扱うことを哲学的社会論・政治論へと翻訳し、世界市民権を説いたカント、

理性と力の癒着の告発がともすると力の理不尽な肯定という迷誤に陥ったニーチェと、理性の哲学が時として謹厳実直な特定のライフスタイルへの固定化を誘引しがちな道德主義的カント、政治的にはこれまでまったく違った陣営に位置づけられていた両者が、デリダとハーバーマスの「翻訳」を通じて21世紀にもっと激しく出会うならば、——そしてすでに20世紀の最後の10年で確実に出会っているのだが——それぞれの迷誤と誘引をもう知らない世代の希望が出てくるというものである。そうすれば、ヨーロッパ憲法の挫折はエピソードに終わり、国際秩序の立憲化という「ユートピアなき理想主義」への道がひょっとして見えてくるかもしれない。これがデリダとハーバーマスのヨーロッパ、つまり、エアバスと武器輸出のヨーロッパではないヨーロッパの自己像である。そして、ひょっとすると、日本の思想の世界でも、「なんとか大学なんとか学会」の習慣も、神様や偶像を引くだけの「神々の戦い」の時代も終わるかもしれない。ヴェーバーがこの表現を使った経験はもう過去のものに属するのだから。

【謝辞】

本稿は2005年10月22日（土）早稲田政治学会で行われた共通シンポジウム「9・11以後のヨーロッパ政治」の際の報告の下敷きになった原稿に加筆訂正したものである。下敷き原稿の性格上、注は原則としてつけていないことをお許しいただければ、さいわいである。また、お招きくださった東京医科歯科大学の田中智彦助教授にお礼をこの場をお借りしてもうしあげたい。

【注】

- (1) これについては拙稿「規範と価値——その区別はどの程度にコンテクスト依存的であるのか？」（東北社会学会研究会編『社会研究』78号所収）参照。